

まぼろしの星宿図

井 本 進*

1. はじめに

太平洋戦争の激闘つづく最中、私は偶然にも日本最古の星宿図が存在することを発見した。その後アメリカ軍の爆撃により、この貴重な東洋文化の至宝は滅失してしまったのであった。それはもう、いまから30年も前の過去となった。幸いにもその星宿図の写真を私は保存していたので、いまその写真を複製してここに本報告と共に発表するのである。(写真はアルバムページ参照のこと)

この写真複製については読売新聞大阪本社科学部長堀内龍獅虎氏の厚意により見事に復原されたことを附記しておく。

30年の歳月の間には、私も古稀を迎えた老境に入り、その写真も変色して褐色になっていたのであった。

2. 格子月進図の発見

この星宿図発見はたしか昭和17年(1942年)の春のことだったと思う。

わが日本軍はミッドウェー海戦で大敗を喫し、サイパン島はアメリカ軍の基地と変わり、その基地から東京爆撃が始められて、その後東京市街は度々の空襲で見られるかげもない廃墟さながらの焼土と化した。

私は大正11年以来、大阪の貿易商社に勤務し、海南島へ軍需品を送る仕事に従事していたが、敵の潜水艦攻撃により、輸送船が門司港を出ると間もなく撃沈された。輸送船には保険をつけていたが、その保険金額は当時の金としては莫大なものであり、私の記憶では七百万円という高額であった。私はその保険金支払請求の用件で上京したことが幾度もあった。東京の東京海上火災保険株式会社が損害保険協会の代理事務を行っていたので、同社本社へ行行ったのであった。それで近くにあった有楽町の東日館に立ち寄る機会が度々あったわけである。この東日館というのは大阪の毎日新聞の事業として建設された近代建築で、ドイツのツァイス社製作のプラネタリウムが設けられており、大阪四ツ橋の電気科学館と共にわが天文界の偉容として、科学の殿堂として、世界でも屈指の施設ということであった。その東日館では戦時中であるにもかかわらず、土御門子爵家伝来の天文関係古文書などの参考資料が展示されていたのであった。土御門家は明治初年のころまで、わが国の天文曆道を司どっていた由緒ある名門で、天の御門に対して地の御門と

して尊ばれて来た家柄で、その起源は遠く、第八代の孝元天皇の子、大彦命から出ており、それより連続と今日まで続いている家系である。土御門家からは阿倍比羅夫、阿倍仲麿、安倍晴明などの人々が出ているが、とくに阿部仲麿は、養老元年(717)、吉備真備、玄昉らと共に遣唐使の一行に加わった人で、その後仲麿ひとり唐に残り玄宗皇帝に仕えて、中国でも有名になった。“天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも”という歌を残したので日本でも名高く、李白、王維など唐の著名文人と交際し、詩文をよくし中国でも文名高かった。天平勝宝5年(753)帰国の途中難破して、唐にもどり在唐54年で死んだ。

吉備真備は日本に帰り、のちに従二位右大臣の位に上った。大衍曆をもち帰ったので有名であるが、この星宿図と関係が深いので、ここにとくに述べる次第である。

さて、東日館に展示されていた古文書の中には、渋川春海自筆の書付けや、幕末の天文方の記録や書籍なども展覧されていたのである。その展覧品の一つに星宿図が一卷あった。その星宿図は縦横に細線で示した方眼紙の上に二十八宿の星を黄・赤・黒の三色でプロットしたものであった。表題は巻首に“格子月進図”と漢字で書いてあるが、その読み方を星宿図の奥書と見られる処に、“ヨルノツキノス、ムヲタ、スツ”また“ジ、クエツ、ノス、ムヲタ、スツ”と解説してある。

格子月進図の読み方は漢音では、“コウシゲツシンジツ”と呼んで差支えないと考えるが、厳密な日本音では上のように読んだものらしい。

当時私が東日館を訪ねたとき、最初はこの星宿図は硝子戸棚に入れて展覧していたし、その図の半分くらいを巻いて展示していたため、全容が判らず、実は余りに近代的な科学的手法で印刷した方眼紙に星を画いたものだと錯覚したほど、その星宿図は精巧に出来ていたのであった。多分明治時代の技術家が時間をかけて克明に画いたとしか受取れなかったのである。ある日、東日館の係員戸田光潤氏(元東京天文台員)に会った時、例の“格子月進図”を手にとって見せて貰うに及んで、意外な事実を発見して驚いたのであった。その星宿図の読み方を上に述べたが、ヨルのルの字、ジ、クエツのシの字などは鎌倉時代あるいは室町時代以前の書き方の古体文字を明かに示しているので、この星宿図は相当古い製作であることが判ったのであった。

巻子の裏面には“以家本写之 散位従四位下安倍朝臣

* Susumu Imoto; The Lost Star Chart

泰世”と墨書されている。すなわち“家本をもって、これを写す”となっており、泰世卿がまだ若かった頃、土御門家伝来の原星宿図によって、問題のこの星宿図を筆写したわけである。

散位というのは令制制であって、位階はあるが職務のない者をいった。

古来天文道を司っていた土御門家には星宿図は存在したはずであるが、私の管見ではこの安倍泰世の写した“格子月進図”が現存最古のものであると推定するのである。

安倍泰世は安倍晴明から第十二代目に当たるが事績はあまりよく判っていない。

太田亮氏編さんの“堂上家系譜大成”(昭和十六年)によれば安倍泰世は陰陽頭天文博士で西市正の職にあった。神田茂氏編さんの日本天文史料 229 頁には文保元年(1317) 2月15日の月食記事として〔花園院宸記〕を引き“権天文博士泰世密奏”の記事があり、その他14個所あまり同様の記録が同じ書にのっているので安倍泰世の大体の在世年代は容易に知ることができる。すなわち泰世は南北朝時代花園天皇と後醍醐天皇(1308—1339)の御代に出て従四位下権天文博士であった。

その安倍泰世が伝来の家本によって“格子月進図”という一巻の星宿図を筆写したのであって、それは実に科学的な手法で描出されており、さながら現代人が方眼紙の上に星を画いたものと誤認されるほど精密に墨で碁盤目に罫線を引き、その上に諸星座の星を点記してある方円星図であって、星は上述したように黄赤黒の三色で識別されており、さらに星の一つ一つに番号を附してあるなどは最新の星図と比べても遜色のないほど全く驚くべき手法で画いてあり、同時に新味をもった古星図なのである。

またこの星宿図が方円図であることは特に注意を要する。

方円図は天文成象図(1699)の記載によると渋川春海(西暦 1639—1715)の考案の如くに解せられるのであるが、この星宿図を見て始めて方円図はわが国で春海以前にも存在したものであって、必ずしも春海の考案でないことが判って来たのである。あるいは春海は独立して考案したのかも知れぬが、春海は土御門泰福などと交渉があったから、あるいはこの“格子月進図”を見て方円図なるものを知っていたかも知れないのである。

すなわち天文成象図には

“曩所著之分野圖北辰爲天中開南平布爲圓圖故南方天度廣星象大而見者難之欲人易悟而再爲方圖以明星表宿度矣”と述べてあるが、春海が創案したとは書いていないのである。

思うに方円図は早く中国の宋の紹聖年中(1094~1097)

蘇頌の編さんした“新儀象法要”巻中に所収の星宿図にもあるから、この図法は中国から伝来したものである。

すなわち円図の方は星図の北方圏に当る天の北極を極とする小円に紫微圈・北斗などの星宿を画き、方図の方には赤道を直線にて表わし、これに対し黄道を曲線にて表わし、その二線が交叉する二つの点をもって、春秋二分点を示している。またこの“格子月進図”には尾宿の北の方から出て天津を通り、造父、積水、天潢を経て井宿の北で終る帯状の太い線が無数の細い墨線で川のような形で画かれている。これはこの星宿図の特長であって、銀河を示したものと考えられる。

また星の経緯度を上にのべた通り方眼式にて精密に示し、さらに星一つずつに番号をつけた点はこの星図の特長として注目せねばならないと考える。

次にこの“格子月進図”の製作年代を知る方法の一つとして廿八宿距度を調査することにした。星宿図下方に記入されている度数を距度広度あるいは星度ともいうが、それら数字を総て合計すると全天の星度総数が得られるが、“格子月進図”では366となる。これは中国の星図に見られない数字でもあり、これまたこの星宿図の一つの特長である。

さらに方位によるそれぞれの二十八宿距度は次の通り唐の一行測るところの度数にきわめて似ていることが判った。

東方七宿			北方七宿		
	格子月進図	唐, 一行		格子月進図	唐, 一行
角	12	12	斗	26	26
亢	9	9	牛	8	8
氐	16	15	女	12	12
房	5	5	虚	10	10少強
心	5	5	危	17	17
尾	18	18	室	16	16
箕	11	11	壁	9	9
計	76	75	計	98	98.25

西方七宿			南方七宿		
	格子月進図	唐, 一行		格子月進図	唐, 一行
奎	16	16	井	33	33
婁	12	12	鬼	3	3
胃	14	14	柳	15	15
昴	11	11	星	7	7
畢	16	17	張	19	18
觜	1	1	翼	18	18
參	10	10	軫	17	17
計	80	81	計	112	111

総計 366 365.25

ここで、唐、一行^{いちぎょう}と記してあるのは、唐の密教僧一行(683~727)が測定した星度を示すものであるが、“格子月進図”の星度とよく合致しており、一致しない宿は氐虚畢張の四宿の星度のみで、他は全部合致するのである。そして星度総計は上に見るように、“格子月進図”は366であるに対し、唐の一行測るところの星度365.25とほとんど合致する。

一行は唐の開元5年(717)玄宗皇帝に仕え、またインドの僧善無畏の弟子となった。そして密教の基本聖典、大日経の注釈である大日教疏を著わしたので有名である。開元9年(721)これまでの暦と天の運行とが合わなくなったので、玄宗の命によって大衍暦を作ったのであって、この時一行は始めて、畢觜參鬼の四宿の星度数を改めた(朱文鑫著曆法通志)。ところが、上に記載の通り、“格子月進図”では、畢の改訂は採用せず、他の三宿のみを採用し、氐と張の二宿で一度多い星度をとっているのである。これまた、この星宿図の特長である。

すなわち(一)方眼図式であること、(二)銀河表現様式の特異性、(三)星座の星に番号を附してある、(四)二十八宿距度(星度)の改訂がある、などこの四点からして、唐、一行測定した星図とはかなりの相違点が認められる。

ここにおいて、次の結論が得られるのである。

吉備真備が唐に留学して、陰陽、天文、曆術、算数などを学んで、その蘊奥を究めて帰朝したのは天平七年(735)であり、続日本紀の記載によると、いろいろの品々の中に大衍曆経一卷、大衍曆立成十二巻などがあつたから、その時当然星宿図も携え帰つたであろう。しかし、それは“格子月進図”そのものではなかったと推測する。多分、それは“格子月進図”の原図となった星宿図であつて、その後日本の何人かによって変改が加えられたと推断されるのである。

なお、これら星宿図の星座一つ一つは、魏の石申が編さんしたという“星経”という書にのっている星座に比べてほとんど同様であることを指摘して今後の研究に譲ることとしたい。

私は問題の“格子月進図”を発見すると間もなく、昭和17年春、続本朝星図略考と題して天文月報昭和17年6月号に、その星宿図が日本最古の現存星図であることを発表したのがあつた。いまから30年前である。当時は学徒動員、兵役・軍属の仕事に従事していた研究者や学者も多かったので、私のこの発表も世人にほとんど伝わらず、したがってその星宿図をさらに調査研究する機会もなく、私も記録として書き留めるだけで、能事終わりとそのまま今日に至つたのである。

その後3年たつて、東京空襲によって上に述べた稀有の文化財は滅失してしまつたのである。まことにこの文

化遺産の喪失を惜む次第である。なおこれは昭和20年5月25日の出来事であつた。

いま考古学界の大発見として騒がれている高松塚古墳の壁画にかかれていた星宿は単なる美術的意図からかいたものでなく、当時のわが国文明の高度性を誇示した科学的記念物として、四方に四神を画きさらに正確に原図となるべき星宿図によって書かれたに違いないのである。

3. 格子月進図と高松塚古墳壁画星宿

“格子月進図”が筆写された年代は上に述べたとおり、わが国南北朝時代でまだ安倍泰世、すなわち土御門泰世が若かつた文保元年(1317)ころと推定することができるが、その星宿図の原図が製作された年代は、はるかに遡るのであつて、吉備真備が唐から持ち帰つた大衍曆経一卷、大衍曆立成十二巻と共に多分その原図も持ち来たらされたものであらうと考えられる。また図は少なくとも、大衍曆にも曆議の部分があり、その中に二十八宿距度を書いた部分があり、それに基づいて星宿図が製作されたかも知れない。もっとも大衍曆が日本にもたらされた年代は前述のとおり、天平七年(735)であるから、年代的に高松塚古墳の壁画星宿ができた時とは、合致はせぬが、高松塚古墳の星宿の原図となつた星図を考定する上にまことによい資料となるわけである。

高松塚古墳壁画製作の年代はいろいろ議論はあろうが、大体西暦700年前後と推定されているので、年代的にはあまり隔っていないわけである。

まず歴史をひらいて見ると、韓国慶州の瞻星台が築造されたのが、善徳女王16年(647)であり、それから29年たつて、飛鳥地方に占星台が天武天皇の4年(676)に造られている。西暦700年までは24年の間隔である。

天武天皇は天文遁甲の術に精通していられたから、天武天皇使用の星図も存在していたと推理できるのである。

唐の時代より前の星図は大体漢の星度によって作られたはずであるから、この“格子月進図”から逆に推算で、天武の星図を製作することも可能となるわけである。

こういう観点から私は日本最古の星宿図を復原してここに発表する次第である。

編集部注：著者が文中で述べているように、本文前半およびアルバムページの写真の一部は、井本進：続本朝星図略考(天文月報35, 67, 1942)と同じものであるが、掲載した。